

氏 名	スラボン インタボン SOULAPHONE INTHAVONG
学位(専攻分野)	博 士 (地域研究)
学 位 記 番 号	地 博 第 30 号
学位授与の日付	平成 18 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	ア ジ ア ・ ア フ リ カ 地 域 研 究 研 究 科 東 南 ア ジ ア 地 域 研 究 専 攻
学位論文題目	Development of Rice - Based Farming Systems in Savannakhet Province, Laos (ラオス・サワンナケート県における稲作基幹農業体系の発展に関する研究)
論文調査委員	(主 査) 助教授 安 藤 和 雄 教 授 山 田 勇 助教授 岩 田 明 久

論 文 内 容 の 要 旨

貧困と栄養失調撲滅のため、農業近代化による生産性の増大はラオスにおいて火急の政策課題となっている。しかしラオス国内の全労働人口の8割が従事している農業は自給生産を主とする小農経営が多数を占め、この現実に沿ったラオス型農業開発アプローチによる農業近代化が求められている。ラオス農民が営む農業体系では、タマサート *thammasad* (伝統的農法) とよばれる考え方が実践されている。農民たちは幾世代にもわたり、各々の地域における環境に適応した固有の技術を確立し受け継いできた。しかし、地域の固有性に応じて農民がどのようなタマサートを好んで用いているのかについては看過されてきた。

本研究の目的は、農業においては伝統的と一般的に解釈されてきたタマサートの現代的意義を明らかにし、ラオスにおける農業体系研究および普及活動に関するより現実的で小農が受け入れやすい政策立案のための基礎情報の提出と提言にある。調査はラオス中部サワナケート *Savannakhet* 県の稲作を基幹産業とするナーコー *Nakhon* 村とカダン *Kadan* 村において1998年～2005年にかけて実施された。博士論文では、第1、2章で論文の位置づけと調査地であるサワナケート県の農業概要が述べられている。第3章では、稲作の奨励新技術に対する農民の対応、営農資源の利用、生産性、家計収入。第4章では、土地利用、作物栽培に関する在来農業技術や知識。第5章では、水田における農民の稲品種選択と多品種を栽培する理由。第6章では、世帯別の土地所有の現状、農作業労働パターンに関する調査結果と議論が展開され、第7章では、以上の議論を踏まえ、結論が述べられている。以下、その概要である。

ラオス国では1986年以来、市場経済化、近代稲作技術導入が積極的にすすめられてきた。特に1992年にはサワンナケート県の低地部地域においても、近代稲作技術が広範囲に普及した。しかし、ナーコー村における1998年と2001年の50世帯サンプルによる世帯経営調査比較から、同地域における新技術の受容レベルは比較的低く、1998年から2001年にかけて家計収入の増加は微々たるものであった。

カダン村では、稲作の歴史は古く、栽培品種の多様さや、地域風土と調和した在来農法が現在も好んで小農に用いられている。農地は最も重要な資源とされ、村の土地の85%が農地として利用されている。稲作が基幹で、農民は、水田を高地 *nadong*、中高地 *natinban*、平地 *nakhok*、中低地 *nathong*、低地 *naxe*、極低地 *nanong* の6つに分類している。農学的分析によれば、この水田分類は、水利環境、土壌特性、地形にもとづき、収量ポテンシャルを示していた。各分類の水田の特性に応じて、異なる水稻品種、作付け様式が選択されており、農民は優れて立地適応型の稲作を展開していた。また、1世帯あたり農地の平均所有面積は、3haであったが、最小面積は0.4ha、最大面積は9.6haと較差が大きく、近代品種の栽培に適した環境(平坦、灌漑設備、肥沃な土壌)にある水田の多くが裕福な農民の所有地となっている一方で、貧しい農民はそれ以外の小さな農地で農業を営んでいた。特に、カダン村では、全世帯の80%以上がそうした小農世帯であり、彼らは村で自給的なレベルで生業を維持していくために、小作、兼業も積極的に取り入れることで生計を立て、立地適応型の在来農法の原則に依拠しつつ、主体的に工夫しながら農業体系の発展を実現していた。村内には慣習による水田のインフォーマルな貸借

関係が発展していた。貸主 *phu hai sao thidin* と借主 *phu sao thidin* の2つのグループが明瞭に認められ、報酬は1作期ごとに現金もしくは対価の現物で支払われていた。当村では小作や、兼業も盛んであり、家族労働が農作業の基本とはなっているが、除草や移植、収穫などの農繁期には、家族外の労働力（労働交換、賃金労働）が不可欠な存在となっていた。また、ここでは1996年に政府によって灌漑設備が建設され、それ以降わずか数年間の間に、近代品種が、農民自身のインフォーマルな経路を通じ導入されていた。2003/04年の栽培年には乾季作の100%の水田で近代品種が、雨季作の天水を主に利用した水田でもタマサートによって65%において近代品種が、35%では在来品種が作付されていた。

調査村に限られた事例ではあるが、本研究において、農民による稲の近代品種の受容には、自然環境と同様に社会経済条件に対応した農民の主体性が深く関係していることを明らかにした。

農業体系におけるタマサートの現代的意義は、立地適応という環境に親和性が高い、農民の主体的な工夫がいかされた技術体系と再定義することでより一層明確になる。ラオス国における農業開発を通じた貧困問題解決のためには、立地適応型の在来農業に関する知識や技術と、農村の自然環境と社会経済条件に十分な配慮が必要であると結論づけた。ラオスの人々が深く理解しているタマサートを積極的に応用し、小農の開発への参加促進と自然環境と社会経済条件に適応した持続的发展を目指すという、ラオス国に固有の参加型農業開発アプローチの必要性を提唱した。

論文審査の結果の要旨

アジアの開発途上国における農業技術開発や農村開発において、1960年代の「緑の革命」という国策としての一方的な農業技術近代化過程への反省から、作付体系研究（Cropping Systems Research）や農業体系研究（Farming Systems Research）の重要性が認識され、農民が行っている農業技術や農業経営の実態調査研究が脚光をあびるようになった。村人たちが、世代を超えて継承、蓄積してきた在地の知識（Local Knowledge）が活用されている在来農法に立脚した、自然環境と社会経済条件に適応した持続的かつ自立的な参加型農業・農村開発アプローチの必要性が提唱されて久しい。しかし問題の複雑さと困難さ故に、在来農法と参加型開発に関する実証研究は個別事例的に扱われてきたのが現状である。いち早く農業近代化に国策として取り組んだバングラデシュやタイなどの国々では農業技術近代化問題は研究課題としては過去の問題となりつつあるが、ラオスには農業技術近代化が現在の問題であるという特殊性、固有性が存在している。労働人口の8割をしめる農民、なかでも大多数を占める小農が依拠する在来農法をどのような形で発展させ、農村開発、農業普及につなげていくかが問題となっている。

こうしたラオスの状況のなかで、他の地域に先駆けて農業近代技術を導入、普及した中部地域に位置するサワナケート県の二つの村において在来農法に依拠した現行農業技術と個別世帯経営ならびに農村社会経済構造を農業体系研究の手法を用いて実態分析を行い、その結果を用いてラオス型の参加型農業開発のあり方を結論として考察した本論文は、農業体系研究と地域研究の両面から、以下の諸点において優れた研究成果として評価できる。

1. ラオスでは村落社会経済調査は制限されてきたが、本論文の第3章、第5章で示されているように、詳しい世帯経営調査を実施し、村落の社会経済実態に関する実証の一次資料を提供している。特に、第3章では、ナーコー村の事例として、稲作の奨励新技術に対する農民の対応、営農資源の利用、生産性、家計収入について1998年と2001年の調査結果を比較検討して時系列分析を行ない、奨励された新技術の受容レベルは比較的低く、家計収入はわずかばかり増加したにすぎなかったことを実証的に明らかにした。

2. 第4章では、カダン村における聞き取り、航空写真、参与観察によって、土地利用、作物栽培に関する在来農業技術や知識に焦点を当て、小農が自らの農業技術を呼称する場合によく用いるタマサート（伝統的農法）と呼ばれる技術の概要を明らかにした。カダン村では、農民の水田の土地分類が、水利環境、土壌特性、地形にもとづいた、収量ポテンシャルを示し、稲品種、作付け様式に対応していた。タマサートと表現される農業技術体系の特徴として、農民は優れて立地適応型の稲作を展開していることをあらためて指摘した。

3. タマサートの技術内容をさらに詳しく調査するために、第5章ではカダン村において、農民の稲品種選択と具体的な稲作技術の詳細について聞き取り調査を行った結果が提示されている。2003/04年の栽培年には乾季作水田の100%で近代品種が、雨季作の天水を主に利用した水田でもタマサートによって65%で近代品種が、35%では在来品種の作付があった。農民

自身が1996年以降のわずか数年間に近代品種をインフォーマルな経路を通じ導入していたことや、水田ごとに異なる稲品種選択の理由を明らかにし、タマサートと呼ばれる技術体系が自然環境と社会条件に積極的に適応してきた農民の主体的な工夫と技術選択であることを指摘した。

4. タマサートを基盤とする農業体系を実践する小農が置かれている村落の社会経済状況の実態把握のために、カダン村において聞き取りと詳細な補足世帯経営調査を行った結果が第6章に提示されている。カダン村では、農民層の分極化が進行しつつあり、慣習による水田のインフォーマルな貸借関係が存在していることと、兼業の実態、農繁期の世帯外の労働力（労働交換、賃金労働）が不可欠であることなどを明らかにした。

5. 以上を踏まえ、第7章では、ラオス小農は、自給的なレベルで生業を維持していくために、小作や兼業によって生計を立て、立地適応型の在来農法の原則に依拠しつつ、所与の自然環境と社会経済条件に適応しながら、ラオス型とでも言える農業体系を発展させてきた現状を指摘した。結論として、タマサートを基盤とする農業を、立地適応という自然環境と社会経済条件に親和性が高い、農民の主体的な工夫と選択によって創出された技術体系と再定義した。ラオスの人々が深く理解している概念であるタマサートを積極的に応用し、小農の農業開発への参加促進と自然環境や社会経済条件に適応した持続的发展を目指す、ラオスに固有の農業開発アプローチの必要性和可能性を具体的に提唱した本論文は特に実践的地域研究としても高く評価できる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成18年1月26日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。